

カルヴァンにおける

「神の像」の〈残り〉の問題

小島一郎

目次

はじめに

一 墮罪と「神の像」の喪失

1 「神の像」は完全に失われたか

(1) 「神の像」は喪失した

(2) 「神の像」の〈残り〉が存在する

(3) 喪失と〈残り〉の関係

2 中世カトリック神学の場合

二 「神の像」の〈残り〉の解明

1 「神の像」における二つの賜物の区別

2 「神の像」の〈残り〉の現実

(1) 自然的賜物としての「たましい」の能力の腐敗

(2) 神認識の可能性

A 〈理性〉の働き

B 〈宗教のたね〉

C 自然的啓示

(以下次号)

- (3) 「市民的義」 iustitia civilis の問題
 - (4) 〈意志〉の自由の問題
 - (5) 〈良心〉の働き
- 3 「神の像」の〈残り〉とその回復
- (1) 神の創造意図
 - (2) キリストにおける新しい創造
- 結び——今後の課題——

はじめに

カルヴァンはその「創世記註解」の緒論において「人間の創造と墮罪」を次のようにまとめている。「世界が創造されたのち、人間はあたかも劇場に置かれたかのように、その世界に置かれたのである。それは人間が自分の上の天や、下の足許に驚くべき神の御業を見出して、それらを創造された方を敬虔な思いで讚美するためであった。

次に、すべてのものが人間の用に供されるべく設定されているということは、より大きな恩恵のもとにあるのであるから、人間は自分自身を神への服従に全くささげ切らねばならなかったのである。

さらに、人間は理解力と理性を与えられており、野獣とは区別されているのであるから、人間はよりよい生活を冥想し、直接神に思いをはせることさえできたのであった。その神の似像を人間は自らの人格に刻みこまれ、身におびていたのである。

ところが、アダムの墮罪の結果、人間は神に反逆する者となった。そこから、人間はすべての「正しき」rectitudo

を失ってしまったのである。このようにしてモーセは、人間を、すべての善を失い、理解において盲目となり、心はひねくれ、あらゆる部分が腐敗し、永遠の死の宣告のもとにあるものとして示すのである⁽¹⁾」

墮罪の結果、人間は神に反逆するものとなり、その *rectitudo* を失ったということが、いわゆる「原義」 *iustitia originalis* の喪失であり、それは「神の像」 *imago Dei* の喪失と言ってよい。

ところで、カルヴァンは一方で、この「神の像」の喪失が決定的・徹底的なものだと強調しながら、他方、「神の像」がどこか、まだ人間には残されているようにも語っている。

これはどうしたことなのであろうか。中世カトリック神学においては、*imago Dei* と *similitudo Dei* との区別をしているので、墮罪によって *similitudo* は失われたが *imago* は残ったとする。つまり、人間本性の中核たる理性や意志の自由は、弱められたにせよ、残っているのである。

カルヴァンはこの *imago* と *similitudo* の区別をせず、神から与えられた人間本性そのものの中に *imago Dei* を見るので、墮罪による *imago Dei* の喪失は、人間が全面的に人間として壊敗し、その本性そのものを失ったと言わざるを得ない。この場合、人間がその本性ないしは人間性を失って、なお人間であり続けることが可能であるのか、と問われる。

カルヴァンの「神の像」の〈残り〉という考えは、この問題への解答の意味をもつであろうが、それは人間の墮罪の現実をあいまいなものとし、自然的人間の神認識の可能性を認め、善行を評価し、ひいてはキリストにおける贖罪信仰、〈恩寵のみ〉、〈信仰のみ〉の救済論を危うくすることにならないであろうか。この問題の解明が小論の主旨である。

一 墮罪と「神の像」の喪失

1 「神の像」は完全に失われたか

墮罪ののちの人間、あるいは生まれながらの人間についてのカルヴァンの発言は、かなり多様な表現をとっているが、大別すると「神の像」を全く失ってしまったことを強調する方向と、それにもかかわらず、何らかの神の像の「残り」を承認する方向が見られる。

しかし、これから見るように、この二つの要素は対立しているのではなく、それなりの統一性と一貫性をもっている。もっとも、ラインホルド・ニーバーは、カルヴァンのこの点での態度は、カトリック的立場とルターの間際に立つもので、一貫性を欠いているが、事実在即しているという意味では、カトリックやルターの立場のいずれよりも、おそらく、より一貫性をもっていると評している。⁽²⁾とにかく、カルヴァン自身のことばに耳を傾けよう。

(1) 「神の像」は喪失した

まず、墮罪によって「神の像」が全く失われたということについて、彼は次のようにのべている。

『神の形』とは、人間の本性の完全な卓越性のことで、墮落前のアダムのうちに輝いていたものである。ところが、これは、そののちはなはだしく破壊され、ほとんど消し去られて、破滅以後は混乱し、切り刻まれ、汚れに染んだもののほか、何一つ残らなくなってしまった⁽³⁾。「すでに初めから、アダムは鏡にうつすように神の義をあらわすべく、神の像にせて造られた。ところがこの像は、罪によって消されてしまった……。さてアダムは、神に似せて造られたけれども、かれは自分の受けたものを失ってしまった⁽⁴⁾。「サタンにあざむかれてしまった人間は、創造主に反逆し、全く変ってしまった。そして人間がそれにおいて形成されていた神の像が抹殺されたほど、人間の墮落はひどいものであった⁽⁵⁾。「われわれは、罪の支配のもとに完全に治められ、導かれていて、われわれの悟性のいっさいと、心情のいっさいと、行動のいっさいとは、罪に傾き、罪に没頭するのである。……もし、これが自発的のものでない

ならば、罪にはならないのである。けれども、われわれは罪に心ひかれていて、自発的にすることと云えば、罪を犯すことのほか、何をもち得ないほどである。⁽⁶⁾……すなわち、『アダムが神の像を失い、それを取り去られて以来、人間の心のうちに残るのは、邪悪以外の何ものでもない』ということを聖書は観察している⁽⁷⁾。

以上のことをカルヴァン自身の言葉で総括すると次のようになる。「人間は最初、神の似姿に形作られた。その目的は、人間が神から貴くも賜わった誉れを用いて、己が造り主を讚美し、神をそれにふさわしい認識をもって敬うためであった。しかるに、かような偉大な美点をその本性に授かっておりながら、……人間は己が主から離れて自らを高しとするにつとめた。このため、人間は、それについておこがましくも誇った神のすべての賜物をうばわれねばならなくなった。すなわち、神を知るという榮譽を、ことごとくはぎとられたのである。……その結果、アダムの種類起源をもつ私たちすべては、神の似姿を内に喪失し、肉よりの肉として生れるようになった。……このために、人間のどの部分に私たちの目を向けようとも、不純な、汚らわしい、神に忌み嫌われるもののほか、何をも見ることができない。すなわち、人間の叡知はまさしく盲い、きわみなき誤謬にまつわりつかれ、やむことなく神の御知恵に逆らい続けるのである。また人間の意志は、悪しくして、頽廢した感情にみち、神の義を何よりもいとうのである。さらにその力も、何一つ善き業を果すことができず、ただけしくも不法へと傾くほかない⁽⁸⁾」。これはカルヴァンが一五三七年にジュネーヴ教会のために書いた信仰の指導書（「信仰の手引き」渡辺訳）の第四章「人間について」の大意であるが、「神の像」の完全喪失の姿を明確に示している。

(2) 「神の像」の〈残り〉が存在する

次に、このような「神の像」の喪失を説きながらも、その〈残り〉についてのべている箇所をいくつかあげてみよう。

「もし誰かが、この神の像はすでに抹消されてしまったのではないかと反論したとしても、解決は容易である。まず、神の像の幾分かの人残り⁹⁾が存在している。それ故に、人は少なからざる品位をもっているのである」

「人間の本性における神の像が、アダムの罪によって取り去られたということには反対があるかも知れないが、神の像のある名残りは認められるにしても、私たちは、神の像は悲しいままに変形してしまったことを認めないわけにはいかない。……しかし私たちには、野獣にまさる多くの賜物が残されているのである」¹⁰⁾

「われわれの固有の本性は理性にある。……ある人が他の人よりもすぐれているというのはどういうわけか。それは人間の普遍的性質の中でも、神の特別な恩寵がきわ立ったものであることを示すためではないか……。しかもなお、これらの多様性の中に、われわれは神の形の何らかの残存のしるしがあり、それが全人類を他の被造物と区別する、ということ(11)を認めるのである」

「すべての時代を通じて、つねに、本性の導きのもとに、全生涯をかけて徳を追い求める何がしかの人々がいた、ということである。……かれらは、公正への努力によって、自己の本性のうちに、ある程度の純潔が存することを示したのである。……このような例は、われわれをいまして、『人間の本性が全く邪悪であるとみなしてはならない』と教えるように思われる。……われわれは、この本性の腐敗のうちにも、神の恩寵が何らかの場所を占めており、それを浄化はしないが、しかし、内的に抑制することを思い浮かべなければならぬ」¹²⁾

「わたしは、不信仰なものの生活のうちにあらわれるすべての卓越した美德が、神の賜物でない、と言うのではないのである。またわたしは、ローマのよき皇帝であったティトウスやトラヤヌスの正義・節制・公平と、荒れ狂った野獣のような支配を行ったカリグラとか、ネロとか、ドミティアヌスとかの狂暴・無秩序・残忍との間に、何の相違もなく、ティベリウスの汚らわしい淫蕩と、ヴェスパシアヌスのこの面での慎しみとの間に、また……法を遵守するこ

ととこれをあなどることとの間に、何の相違もない、と言うほど一般常識をはずれてはいない。……もし、われわれがこれらを混同するならば、世界にいったいどういう秩序が残るであろうか。そのようなわけで、主なる神は、めいめいの精神のうち、気高い行ないと、恥ずべき醜悪な行ないと、このような区別を印銘したもうたのみでなく、さらに御自身の摂理の配分によって、しばしばにわたってこのことを確認したもうたのである。……したがって、いましがたわれわれが告白したように、このような美德は——あるいはむしろ、美德の模造品は——神の賜物なのだ。なぜなら、神に由来するものでないならば、これらは、いかなる意味においても賞讃を得ることができないからである⁽¹³⁾」

これらの表現は、人間は「神の像」を失ったとしても、依然として人間としての品位を保ち、動物や他のいっさいの被造物と区別されるものを残していること、しかも、神の恵みの助けによって、道徳的な生活をし、神の賞讃に及ぶことも可能であることなどを意味している。

もしそうであれば、これは、人間の墮罪の結果、人間はすべてを失い、悲惨な存在となったという、カルヴァンの「全墮落の教理」(Doctrine of Total Depravity, or Total Perversity)と矛盾することにならないであろうか。

(3) 喪失と〈残り〉の関係

フランソワ・ヴェンデルは、カルヴァンが人間の善行や美德らしきものを認めるとき、人間の行為それ自身に価値があるのではなく、ただ神の特別な恵みによるものであることを指摘すると共に、それがたとえどんなに立派な行為に見えようとも、実は腐敗していることを、カルヴァンはアウグスチヌスの「異教徒の美德は悪徳以上の何ものでもない」(ユリアヌス駁論IV・3・25、26、32)という言葉をひいて、はっきりさせているとのべる⁽¹⁴⁾。つまり、決定的・徹底的な墮罪のわくのなかで、相対的な〈良心〉や〈意志〉の働きを認めているに過ぎないと見ているのである。

次にこの方向でのカルヴァンの発言に、さらに注目しよう。

「むろん、われわれがキリストから離れていてもなお、われわれのうちにいくらかの生命が残っているということはわたしも認める。なぜなら、不信と言えども、感情や意志や、その他たましいの能力を完全に消し去るものではないからである。しかし、それが神の国でなんの役に立つというのか、至福の生になんの役に立つというのか。……キリストのそとにあっては、罪（死の原因）がわれわれを支配している以上、われわれはまったく死んだものなのだ、というのを心にとめよう」⁽¹⁵⁾

「我々がこの世に生まれ出るとき、アダムが創造された当初の『神の像』の何がしかの〈残り〉をたずさえてくるということは本当である。しかしその同じ像は、我々が不義に満たされているのと同様に、醜くくされている。そして我々の心の中には、盲目と無知以外の何物もない」⁽¹⁶⁾

「かれのうちに『神の形』は徹底的になくされ、取り去られたわけではない、とわれわれは認めるのであるが、それははなはだしく腐敗していて、残っているものはどれもこれも、恐ろしいまでに醜悪になっている」⁽¹⁷⁾

「われわれは俗な言い方をして、『この人はよい〈本性〉をもって生まれた』、『あの人は悪い〈本性〉をもって生まれた』と言うのをはばからない。しかし、われわれは、この両者とともに、人間の普遍的な墮落の状態に包含することをやめない」⁽¹⁸⁾

ルカによる福音書一〇章の「良いサマリヤ人」のたとえの中で、盗賊によって半死半生になって道に投げ出された旅人は、墮罪の人間をあらわしているという議論について、カルヴァンは言う、「われわれの反対者はこう論じ立てるのである。『人間は罪と悪魔との掠奪によっても、最初の善のおもかげが残らぬほどにまで、破壊されたのではなかった。なぜなら、半死半生で捨ておかれた、といわれるからである。つまり、正しい理性と意志とのいくぶんかが

残っていない限り、どうして半分生きている、といわれるのか』というのである。……かれらはいう『人間は半分だけ生きている』、『それゆえ、ある程度の健全さをもっている』。わたしも認める。たしかに、人は知解することのできる精神をもっている——天上的な靈的な知恵までは達し得ないとしても……。また、美德についての何がしかの判断をもっている——たとい神についての真実な分別にまでは達しないとしても……。神的なものについての何がある程度
 の感覚はもっている。けれども、これらが何になるのか。たしかに、これらをもつても、われわれにあるアウグ
 スチヌスの言ったことを捨てさせるわけには行かない。……いわく『墮落のち、人類からは、価なしの恵み——救
 いがそこにかかっていた——は取り去られ、自然的な恵み（すなわち、救いに導くことのできないもの）は、腐敗し、
 汚染した』と。そういうわけで、われわれは、いかなるからくりをもつてもゆるがすことのできない次の真理を、疑
 う余地のないものとして確立させよう。すなわち、『人間の精神は完全に神の義からそむき去っているので、そこ
 は不敬虔な、ねじけた、醜悪な、不純な、破廉恥なこと以外、何ひとつ考え、願い、くわだてることができな
 いほどである。〔同様に〕かれの心には、罪の毒が全くしみこんでいて、腐敗の悪臭のほか、何ひとつ発散することができ
 ない。また、たとい、人によっては、ときに善の外面を示すことがあるとしても、しかしその精神は、いつも偽善と
 虚偽との歪曲のもとに包まれ、内なるよこしまによって、そのたましいは、からみつかれたままなのである』と⁽¹⁹⁾
 「しかし今や、神の像のある不明瞭な特徴は我々の中に残っているのが見出されはするが、しかしそれらはあまりに
 も損なわれ、不具となり、それらは破壊されたと言った方が真実となったのである。というのは、どこにも見苦しく
 あらわれる醜悪のほかに、罪の影響から逃がれることのできる部分はないという、この悪がまた加えられているから
 である」⁽²⁰⁾

以上見てきたように、カルヴァンは、人間の墮罪によって「神の像」はほぼ完全に喪失したと言い、もしも〈残り〉

があるとしても、まったく罪にまみれており、かろうじて野獣との区別が認められる程度であるという。

こうしてみると、カルヴァンの言う「神の像」とは、基本的には神と人間とのかわり方を示す「関係概念」*Beziehungsbegriff* であると共に、人間本性の働きを示す「機能概念」*Funktionsbegriff* でもあると考えられる。全堕落のもとにあってもなお人間は〈理性〉*ratio* や〈意志〉*voluntas* そのものを失うことはない、カルヴァンは認めているからである。

この辺のところを更に整理・検討するに当たって、まず中世のカトリック神学の場合を見ておきたい。

2 中世カトリック神学の場合

アウグスチヌスからトマス・アクィナスに至る中世スコラ学においては、知性の優位が貫かれているといつてよいであろう。「〈人間理性〉は、恩恵によって否定され、まったく新しいものに再生されるのではなく、それは恩恵に助けられ、強められ、支えられるものであり、トマスにおいては、まさしく〈恩恵は自然を破壊せず、かえってこれを完成する〉(*gratia non tollit naturam, sed perficit*) のである」と指摘されるとき⁽²¹⁾、墮罪のもとにある人間といえども、その「本性」*natura* の中核たる理性や意志の自由は失われることなく働くというのである。

こういう考えの背後には、イレナエウス以来の、*imago Dei* と *similitudo Dei* とを区別する人間理解がある。

創世記一章二六節の「われわれのへかたち」に、われわれにへかたどって人を作ろう」(「*Faciamus hominem in imagine nostra, secundum similitudinem nostram*」) から、へかたど(像)〈*imago* とへかたどり(似姿)〈*similitudo* とは別の内容を意味するとしたのである。

すなわち、*imago* は理性や自由意志をもった人間の自然の本性であり、「自然的な賜物」*donum naturale* と呼ばれ、これが人間を動物と区別するゆえんのもので、「人間性」*humanitas* とも言われる。

それ故にたとえ墮罪によっても、この *imago* は失われないのである。人間はあくまで人間だからである。

それに対して、*similitudo* は「超自然の賜物」*donum supernaturale* とか、「過分の恩恵」*donum superadditum* と呼ばれる、神との特別な超自然的な交わりを意味し、「原義」*iustitia originalis* ともいわれるもので、この霊的な賜物は、アダムの墮罪によって失われたのである。

つまり、墮罪によって失われたものは、この *similitudo* であって、あの *imago* ではないということになる。ここにおいては、人間における「自然」と「超自然」、「自然」と「恩恵」とが区別され、墮罪によって、人間の超自然的・霊的要素は全く失われたが、自然の賜物は残されているので、恩恵の助けをかりて、自然の働きを強めることができるのである。

なお、イレナエウス、アタナシウス、アウグスチヌス、トマス・アクィナスなどの、*imago* と *similitudo* の区別をする立場に対して、アンセルムスはアウグスチヌスの影響を受けながら、この *imago* と *similitudo* との区別をせず、*imago* のみを考えた。

アンセルムスは *imago Dei* を、「墮落以前の神の像」、「墮落した神の像」、「修復された神の像」の三つに分ける。「墮落以前の神の像」としての人間は、人間の能力である〈意志〉*voluntas* と〈理性〉*ratio* が本来一致しており、理性が神とその真理を正しく認識し、善と愛を行うことが可能であったが、「墮落した神の像」としての人間は、〈意志〉と〈理性〉が分裂し、神を認識することも愛することも不可能となった。しかし、〈意志〉は意志能力を全く失ってしまったのではない。〈意志〉は意志としての、いわば健全性を失ったに過ぎないのである。この見解は、のちのルターやカルヴァンと結びついていく。⁽²²⁾

二 「神の像」の〈残り〉の解明

1 「神の像」における二つの賜物の区別

カルヴァンは、トマス・アクィナスに代表されるような当時のスコラ学ないしカトリック神学に対して、*imago Dei* と *similitudo Dei* を区別することに賛成せず、両語を同義として取り扱い、もっぱら *imago Dei* の語を用いている。この点ではルターと同様である。

さてしかし、墮罪における人間は「神の像」*imago Dei* を喪失したと言われながら、なおそこに〈残り〉があると思われるとき、それは何を意味しているのだろうか。

カルヴァンは、ペトルス・ロンバルドゥスの言葉をアウグスチヌスの言葉と思いこんだらしいのであるが、「すべての人の口には〔アウグスチヌスの〕『人間における自然的な賜物は腐敗しており、超自然的な賜物〔すなわち、天上の生にかかわるもの〕はことごとく取り去られている』ということわざが行きわたった。……わたしは、たしかに自然の腐敗がいかにひどいものであるかをはつきり伝えたいと思ったならば、このことばで容易に満足したであろう。ではあるが、自然的本性があらゆる部分にわたってそこなわれ、その上超自然の賜物ははぎ取られている人間にとって、何ができるかを注意深く考量することは、十分意義のある仕事である」といって、「神の像」として与えられた賜物には、「自然的な賜物」*donum naturale* と「超自然的な賜物」*donum supernaturale* があるとして、二つを区別し、前者は損われてはいるが残っており、後者は完全にはぎ取られたとする。

さらに具体的に言うならば、人間理性の働きは、この世の生の領域については比較的によく働くが、この世の生の領域を越えた所では、全く無力であるということになる。「そこで、両方の事がらにおいて、この機能がどこまで達するかをよりよく知るために、区別を立てることが、われわれには必要である。そういうわけで、一方には地上的な事がらについての理解があり、他方に、天上的な事がらについてのそれがある、というふうな理解である。へ地上的

な事がらゝとわたしと呼んでいるのは、神と神の国に、真実の義に、来たるべき生の浄福にかかわりなく、現世の生に根拠と関連とをもって、いわば、その限界内に制約されているものことである。△天上の事がらゝというのは、神についての純粋な知識、真実の義のあり方、また天上の王国の奥義のことである。第一の種類のうちに、政治、家政、すべての技術、および自由学科の陶冶がある。第二の種類には、神と神の意志についての認識、および、これのつとって生活を形作るべき規範がある⁽²⁴⁾。要するに、自然的な賜物は地上的な事がらにかわり、超自然的な賜物は天上的な事がらにかかわるのである。そして、自然的な賜物は残り、超自然的な賜物は墮罪によって完全に失われたというのである。

これはまた、別の表現をすれば、「原義」*iustitia originalis* あるいは「靈的義」*iustitia spiritualis* は失われたが、「市民的義」*iustitia civilis* は残っているということになる。

2 「神の像」の△残り△の現実

さてカルヴァンが「神の像」を「自然的賜物」*donum naturale* と「超自然的賜物」*donum supernaturale* の二つに分け、「原義」*iustitia originalis* と「市民的義」*iustitia civilis* を区別したということは、結局、カトリック神学における *imago* と *similitudo* の区別、従って、*pura naturalia* と *dona superaddita* の区別、つまり「自然的賜物」*donum naturale* と「超自然的賜物」*donum supernaturale* とを分けて考える立場と、どのように相違するのであるうか。このように、カルヴァンが神の賜物や義を二つに分けることは、大塚節治氏によれば、カトリック的理解と「同巧異曲」である⁽²⁵⁾。果してそうであろうか。

そこでカルヴァンは、「神の像」の△残り△ということ、何を言おうとしているのか、墮罪における人間にあっては、「自然的な賜物」はどのような働きをするのか、もう少し詳細に見てみよう。

カルヴァンは「申命記についての説教」の中で次のように言う。

「アダムの背反によって、我々は神にまったく敵対するものとなっているので、我々のあらゆる能力は腐敗しており誤りやすいものである。へたましいの能力とは、理解力、理性、意志、判断力のことであり、これらのものはすべて、アダムの神からの離反によって、徹底的に壊敗している。そしてその証拠は、アダムが神の像に似せて造られたこと以外、最初の人間がもっていた理性と知恵は、彼自身のうちにはなくなったということである。それ故に彼は、すべての善の源である創造者から引き離されてしまうやいなや、神が最初に彼にお与えになったすべての恩恵を奪われないわけにはいかなかった。そこで、アダムがどのようにして自分を神の国から追放してしまったのか、そして、最初に与えられた霊的な豊かさの代りに、今では彼のうちには、あらゆる姿の悲惨以外には何もなくなることがわかるのである。なぜなら、我々が彼から受け継いでいるものは、神の恩恵を全くはぎ取られることだからである。ただ、たとえ我々が生まれたままの姿であっても、野獣のようであってはならないというみ旨から、依然として神の恵みのある名残りが、確かに残っているというのは本当である。異教徒たちは神の御霊によって改革されてはいないけれどもやはり彼らは、牛やろばや犬のようなものではない。それ故に我々は、最初の人間に刻みこまれた神の像のしるしまったく腐敗させてしまっているとはいえず、依然として幾分かを身に帯びているのである。それというのも我々は、善と悪との判断はできるけれども、それはやはり、正しい教理の完全さにまで我々を導くことはできないし、我々に神を知らせることも、我々に心から神をあがめさせることも（当然なすべきことであるが）できないからである。我は、神が存在するという、ある知識のたねをもってはいるが、我々は自分の思想に眩惑され、自分に対する空虚な盲目的な愛情を生み出している。そこから、かつてこの世にあった、あらゆる偶像礼拝が生じる。なぜなら人間は、あがめられるべき確かな神の尊厳の存在することを、よく知っていながら、なおそれにいたることができず、光が

自分の中にあるにもかかわらず、いろいろな想像で自分自身を欺いているからである。それによって、人間は、罪のために、正しい道に一步もふみ出すことができないほど、すべての良い理解力を失っていることを示している。要するに、我々がもっているすべての理解力や理性は、ただ我々を、いよいよ弁解できないようにさせるのに役立つばかりである。何故なら、我々は知らなかったと言いわけをすることはできないからである。そこで今や、神が御自身を人間に開示されたとしても、人間のうちには、神を認識すべき理解力がないことを我々は知っている。それ故に聖パウロは、生まれながらの人間は、御霊に属することを理解できない、という。人間はひどいつむじ曲りなので、理解しようとしなないというのではなく、全然理解できないのである。要するに、理解する能力が、我々のうちにはないのだと、パウロは言っているのである。……意志が我々の中でねじ曲っているように、我々の霊もそれ以上に、はなはだしい無知に包まれているので、神が特別の恩恵をもって、我々を照らして下さらなければならないほどである。もしもそうして下さらないとしたら、神のみ言葉やみわざを、我々にふさわしいものとは、我々は決して考えないであろう。神が我々に耳と目と心の霊をお与え下さるまでは、我々は神のみ旨に真正面からさからって行かざるを得ない⁽²⁶⁾」
 ここには、墮罪のもとにあり、「神の像」を喪失した人間の姿が総括的にのべられており、いくつかの重要な点が明らかにになっている。

(1) 自然的賜物としてのへたましいの能力の腐敗

カルヴァンが「外的な人間においても、神の栄光は照り輝くけれども、神のへかたち⁽²⁷⁾のすえられる場所がへたましい⁽²⁷⁾にあることは疑う余地がない」というとき、「神のかたち」imago Deiとは、神との人格関係であると考えて、これを成り立たせる人間的な基盤がへたましい⁽²⁸⁾であると言うのであろう。そしてそのへたましい⁽²⁸⁾とは、へ知性⁽²⁸⁾ratio とへ意志⁽²⁸⁾voluntas からなっているとされる⁽²⁸⁾。そこでアダムが、このへ知性⁽²⁸⁾とへ意志⁽²⁸⁾とを働かせて「正

しい理解力を持ち、感情を理性に即してとのえ、いっさいの感覚を正しい秩序のもとに抑制し、自分のすぐれているゆえんは、造り主から与えられた格別の賜物によるものであることを弁えて⁽²⁹⁾「いたならば、神との〈正しいかかわり〉*recitudo* が成り立ち、「神の像」*imago Dei* がそこにある、⁽³⁰⁾ということになる。

もちろん、人間の理性や意志そのものの能力によって、人間の方から神に働きかけ、神との関係が成立するのでなく、神との人格関係は、ただ神の自由な恵みのみわざとして、その特別な賜物として与えられるものである。つまり自然的な賜物としての〈たましい〉の働きの上に、超自然の賜物としての *recitudo* が成り立つ。この二重構造がカルヴァンの「神の像」*imago Dei* であって、カトリック神学が「自然の賜物」としての *imago* と「超自然の賜物」としての *similitudo* とを並列に並べて、一方の喪失のみを考えるのは、決定的に異なるといつてよい。

ニーゼルは、カルヴァンが教父たちの表現方法を受け入れて、「〈肉体〉と〈たましい〉とは、人間が受けた『自然的な賜物』である。けれどもそれに対し、『神の形』であることは『超自然的な賜物』であると言っているという⁽³⁰⁾がそうではなく、〈肉体〉と〈たましい〉において初めて人間は人格的主体なのであり、この「自然的な賜物」を通して、神との人格的關係としての「靈的・超自然的な交わり」*recitudo* にあずかることができるのであって、両方の賜物の正しい統一的なあらわれこそ、カルヴァンのいう「神の像」*imago Dei* ではないであろうか。⁽³¹⁾

従って、人間が神に反逆して神との人格関係を拒否したとき、神と人との愛と信頼の關係は崩壊し、「神の像」は喪失したと言われるが、この〈關係の変化・あり方の変化〉は、〈機能の変化・働きの変化〉をもたらしのは当然である。すなわち、それをもって神との人格関係を成立させるはずの〈理性〉や〈意志〉そのものは、神の恵みによって全面的には消滅しないまでも——消滅すれば人間と動物の区別はなくなろう——その働きは、いちじるしく悪性のものとなる。これが「自然的賜物の腐敗」と呼ばれるものである。

「精神の健全さと、心情の公正さとは同時にうばい去られたのである。そして、これが自然的な賜物の腐敗である。すなわち、知性と判断力とのなにかの残余は意志とともに残っているとはいえ、しかもわれわれは、こんなにも無力にされ、おびただしい闇の中に包まれた精神を、完全であり、健全であるということはできない。〈意志〉の墮落については余りにもよく知れわたっている。そういうわけで〈理性〉は——これによって人は善・悪を見わけ、理解し、判断するのであるが——自然的な賜物であって、そのため、完全には消し去られていない。しかし部分的に弱り、部分的に破壊されているので、そこなわれた形でしか残っていないのである。……第一に、人間のよこしまな、墮落した本性のうちにも、今なお火花がひらめいており、それが、人間は知性を与えられているが故に理性的なものであって、野獣とことなることを示すのである。しかし第二に、この光は厚い無知の中に窒息させられていて、有効にあらわれ出ることができないのである。このように、〈意志〉は人間の本性から引き離すことのできないものであるため、全滅するには至っていないが、しかし、倒錯した欲情に征服されていて、正しいものを何一つ欲することがない⁽³²⁾」とカルヴァンの言うのはこの意味である。

(2) 神認識の可能性

さてそこで、「神の像」の〈残り〉としての「自然的な賜物」の働きを、理性、意志、良心の三つに分けて考察しよう。

A 〈理性〉ratioの働き

墮落した人間、「神の像」を失った人間に残されている〈理性〉ratioによって、神認識が可能であるか。これは明かに否、である。それは、いままでに見てきたカルヴァンの言葉のほか、「神に関し、吾々自身によって考えられ又語られる凡ての事がらは、空しき愚であり無力なるものである⁽³³⁾」とか「人間の精神はその無力のために、神の聖なる

御言葉によって助けられ・支えられなければ、どうしても神にいたることができないので、すべての死すべき人間はユダヤ人を例外として、虚妄と誤謬とのうちに没頭せざるを得なかった。すなわち、ユダヤ人以外は、御言葉によらず神を探ね求めたからである⁽³⁴⁾と言われる通りであり、何よりも「キリスト教綱要」第一篇「創造主なる神を認識することについて」De cognitione Dei creatorisの第六章「創造主なる神に達するためには、聖書がわれわれの導き手また教師となる必要がある」Ut ad Deum creatorem quis perveniat, opus esse Scriptura duce et magistraにおいて、まことの神認識は、神の御言葉としての聖書によってのみ与えられ、人間の能力や自然の啓示によって是不可能であると論断していることで明かである。いわゆる「自然神学」theologia naturalisは否定されているように。

B 〈宗教のたね〉semen religionis

ところがカルヴァンは、同じ「綱要」の第一篇第三章「神についての知識は人間のうちに生まれながらにして入れられている」において、生まれながらの人間にも〈宗教のたね〉semen religionisないし〈神についての感覚〉sensus divinitatisが与えられているという。

「われわれは、人間の精神のうちに、自然的衝動といってよいような、神的なものへの感覚がそなわっていることを議論の余地のないこととして立てるのである⁽³⁵⁾」、「ところで、あの異教徒が言うように、どんな野蛮国民でも、どんな粗暴な人種でも、『神がある』という確信をもたないものはない(キケロ「神々の性質について」)。そして、他の点では、けだものと違ふところが少しもないように見えるものでも、つねに宗教の何らかの種(たね)を宿しているのである。この万人共通の観念は、これほどまで徹底的にすべての人のたましいのうちを占領し、これほどまで執拗にすべての人の内臓のうちにくいこんでいる。……そこに、すべての人の心には神についての感覚がきざみつけられて

いる、との無言の自白が行われている⁽³⁶⁾」

これらの言葉は、人間性の中には宗教性が本来こめられており、宗教の普遍性を主張していると思われる。そうであれば、これはカルヴァンが「自然的な啓示」ないし「一般的啓示」を認めているということになる。

そこで問題は、この「自然的・一般的啓示」と、聖書による啓示、イエス・キリストにおける「特別な啓示」との関連である。エーミル・ブルンナーやエンゲルラントは、カルヴァンが一般的な啓示と聖書の啓示とを段階的に考え前者の不十分な所を後者が補充完成するものと見ているとして、ブルンナーはこれに賛成し、エンゲルラントはこれに反対している⁽³⁷⁾という。

いずれにせよ、もしも、カルヴァンが、「宗教のたね」による認識を神認識の第一段階と考えたとすれば、ここに自然神学的な可能性が見られることになるが、果してそうであろうか。

注意深くカルヴァンの発言を聞くならば、彼は「宗教のたね」によって、あるいは「神について」の「感覚」によって神を認識できる⁽³⁸⁾とは言っていない。

彼の主張のポイントは、「宗教のたね」がすべての人にそなわっているということ。「何びとも無知にかこつけて言い逃れをすることがないように、神御自身が自らの神々しさについてのある悟りを万人のうちに生じさせ、この記憶を不断に更新するために、くりかえして新しいしずくをしたたらせたもう。……このため、すべての人は、最後のひとりにいたるまでみな、神がいますこと、その神に自分が造られたことを悟り、この神を礼拝せず、この神の意志に己れの生活を捧げないことについては、自分自身の証言によって罪に定められるようにされ⁽³⁸⁾」るためであるという点にある。

つまり、この「宗教のたね」は、誰も神の存在を否定したり、神を無視して生きる口実をもうけることができない

程度には、おぼろげではあるが、神を指し示す働きをする。従って、神を信じないということ、人間の無知に帰することはできず、神の存在を知りながら、これに従わない罪として、さばかれざるを得ないとされる。

しかし、天地の創造者なる、まことの神を認識し、これを礼拝するには、イエス・キリストの啓示が必要であり、キリストによらずしては、神との人格関係は成り立たないと、カルヴァンは言うのであるから、彼が「宗教のたね」を、神認識の可能性の一段階と見ていたことは無理であろう。この点で、墮落した人間に残された「神の像」としての「理性」は、多小弱ってはいるけれども、有効に働き、恩恵の助けをかりるならば、立派に神認識が可能であるとされるカトリックの見解とは、大きな開きがあると言わねばならない。このことを明確に示すのは、次のカルヴァンの言葉である。

「本来人間に与えられた光はこの現状によって評価されてはならない。それは、この腐敗し墮落した本性にあっては光は闇に変えられてしまっているからである。それにもかかわらず、理性の光は完全には消されていない。それというのも、人間の心の深い暗闇のただ中に、明るいきらめきの幾分の残りが依然として輝いているからである。……我我の中に依然として残っているあのかすかな光によって、神の御子はたえず人々を御自分の所へお招きになったのであるが、これは何の役にも立たなかつた。それは「見ても見えなかつた」からである。つまり、人間が神に離反して以来、人間の心は無知という情ない状態に、あまりに完全に圧倒されているので、残っている光のどんな部分も消されて、役に立たなくなっているのである。経験もまたこれを日毎に証明している。というのは、神の御霊による新生を受けていない人もすべて理性をもっており、人間がただ息をするようにではなく、理解力をもつように造られたという事は、我々が明瞭に教えられているところである。しかし、人間はこの理性の導きによっては神のもとに來ないし、近づくことさえもない。それは人間の理解力のすべては、空虚以外の何ものでもないからである。それ故に、

神が新しい助けをお許しにならない限り、人間には救いの希望はない、ということになる。というのは、神の御子が人間の上に光を照らされるとしても、彼らはあまりに愚鈍なので、その光の源を理解しないばかりか、愚かで悪しき空想によって、完全な狂気へと運び去られるほどだからである。腐敗した人間本性の中に残っている光は、主に二つの部分から成っている。すなわち、すべての人間には生まれながら、宗教の何がしかのへたね \vee がまかれているという事、さらに、人間の良心には、善と悪の区別が刻みつけられていることである。しかし、その宗教が迷信という無数の怪物へと墮落し、良心が悪徳と美德を混同するほどあらゆる決断を誤るということ以外に、そこから究極的に生み出される結果は何であろうか。つまり、自然的理性は決して、人間をキリストへと導くことはないのである⁽³⁹⁾」

C 自然的啓示

このように、「神の像」のへたね \vee としてのへたね \vee を、以上のように位置づけたとしても、なお一つ「自然的啓示」を暗示するカルヴァンの言説を、どう理解すべきであろうか。たとえば、「綱要」第一篇第五章「神についての知識は、この世界の創造とその不断の統治とによって、明らかにされる」の前半(一一〇節)では、被造物を通して神は自己啓示をされるので、生まれながらの人間も、この自然啓示にあずかれるかのような表現が見られるのである。

「さて、幸いな生の窮極目的は、神を認識することにおかれるのであるから、この幸いに近づくのをさえぎられるものが、誰一人もないように、神はわれわれが語ってきたへたね \vee を人々の心に植えつけられただけでなく、世界のうちにあるすべての御わざにおいて、御自身を啓示し、日に日に御自身を明らかに示したもう。そのため、人々は目を開く限り、神を注視せざるをえないように⁽⁴⁰⁾されている」

「われわれは、神を探究する最も正しい道、また最もふさわしい順序は、次の通りであると理解する。すなわち、わ

われわれは神の本質を、向こう見ずな好奇心で探ねるほどに深入りすることを企てず……ただ神をその御わざにおいて
 —すなわち、その御わざによって神はわれわれに近く・また親しくなりたまひ、ある意味で御自身を伝達したもう
 —瞑想するのである⁽⁴¹⁾」

「ここでは、「教会の」内の人であろうと・外の人であろうと、神を探ねる道は共通だということに言及しておきた
 いのである。すなわち、神の生ける御姿の輪郭を、あるいは高くに・あるいは低くにたどることによって追求するこ
 としかないのである。さて、神の御力はわれわれを導いて、その永遠性を認識するにいたらせる⁽⁴²⁾」

これらのことばは、これだけ聞くと、カルヴァンは確かに、「自然的神認識」の道をのべているようであるが、そ
 うであろうか。否である。それは彼の次の言葉で明かである。

「わたしは、ただアダムが墮落しないままにとどまっていたとしたならば、自然の本来の秩序に導かれてわれわれに
 そなわっていたであろうところの、基本的な・単純な知識について語っているのである。すなわち、今この全人類の
 破滅のただ中において、神を父として、あるいは救いの創立者として、あるいは何らかの意味で好意ある御方とし
 て感得することは、キリストがわれわれに平和をもたらすために神とわれわれとの間に来たりたもうまでは起らない⁽⁴³⁾」
 「たしかに、神を知る知識のたねが、自然の驚くべきたくみさによって、精神のうちに植えつけられているのに、こ
 れをすぐに腐らせてしまったため、尊き・真実な実を実らせるにいたらなかった罪責は、人に帰せられなければなら
 ないとしても、最も真実なことは、被造物によって立派に示される証しだけでは、神の栄光について、われわれを教
 えるに決して十分でない、ということである⁽⁴⁴⁾」

その他、第一篇第五章の一一—一五節は、「自然において神を啓示されても、それは益にならない」、「自然におけ
 る神の証しからは、結局何の益も受けることができない」など、本来の人間は、つまり墮罪前の *iustitia originalis*

をもち、*rectitudo*のもとにあった人間ならば、自然を通して立派に神を認識することが可能であり、神の栄光をあらわし得たのであるが、残念ながら *imago Dei* を失ったのちにおいては、もはや「自然神学」 *theologia naturalis* への道は、ふさがれていると見るのが、カルヴァンの本意であろう。

(以下次号)

註

- 1 Calvin, John; *Commentary on Genesis, Argument*, p. 64—65.
- 2 Niebuhr, Reinhold; *The Nature and Destiny of Man*, vol. I, p. 285, foot-note 4.
- 3 カルヴァン「キリスト教綱要」(渡辺信夫訳) I・15・4 二三二ページ
- 4 カルヴァン「新約聖書註解」X (ガラテヤ書・エペソ書) エペソ書 4・24 二三五ページ
- 5 Calvin, John; *Commentary on Genesis*, Gen. 3・1, p. 139.
- 6 カルヴァン「新約聖書註解」VII (ローマ書) ローマ書 7・14 一八三ページ
- 7 同書 ローマ書 7・15 一八六ページ
- 8 カルヴァン「信仰の手引き」(渡辺信夫訳) 一四—一五ページ
- 9 Calvin, John; *Commentary on Genesis*, Gen. 9・6, p. 295.
- 10 Calvin, John; Calvin's, N. T. Commentaries, vol. 3. James 3・9, p. 292.
- 11 カルヴァン「キリスト教綱要」II・2・17 五二—五三ページ
- 12 同書 II・3・3 七一—七二ページ
- 13 同書 III・14・2 一一—一二ページ
- 14 Wendel, Francios; Calvin, p. 192.
- 15 カルヴァン「新約聖書註解」X (ガラテヤ書・エペソ書) エペソ書 2・1 一七六—一七七ページ

カルヴァンにおける「神の像」の〈残り〉の問題

- 16 Calvin, John; Sermon on Job 14・13—14 quoted from “Calvin’s Doctrine of Man” by T. F. Torrance, p. 93.
- 17 カルヴァン「キリスト教綱要」I・15・4 二一九ページ
- 18 同書 II・3・4 七三ページ
- 19 同書 II・5・19 一二九—一三〇ページ
- 20 Calvin, John; Commentary on Genesis, Gen. 1・26, p. 95.
- 21 印具徹「スコラ学」キリスト教大事典 五九三ページ
- 22 印具徹「中世思想——中世スコラ学を中心として」一三〇—一三一ページ
- 23 カルヴァン「キリスト教綱要」II・2・4 三五—三六ページ
- 24 同書 II・2・13 四八—四九ページ
- 25 大塚節治「基督教人間学」二四五ページ
- 26 Calvin, J.; Sermon on Deuteronomy, 29・1 f, quoted and translated into English by T. F. Torrance in “Calvin’s Doctrine of Man” p. 93—97.
- 27 カルヴァン「キリスト教綱要」I・15・三 二一六—二一七ページ
- 28 同書 I・15・7 二二五—二二六ページ
- 29 同書 I・15・3 二一九ページ
- 30 ニーゼル「カルヴァンの神学」(渡辺信夫訳) 八七ページ
- 31 Torrance, T. F.; Calvin’s Doctrine of Man, p. 83.
- 32 カルヴァン「キリスト教綱要」II・2・12 四七ページ
- 33 Calvin, John; Opera selecta, III・112・8 桑田秀延「神学の理解」中、『カルヴァンに於ける神と人間——自然と思想の問題を中心として——』七四ページより引用
- 34 カルヴァン「キリスト教綱要」I・6・4 八六ページ
- 35 同書 I・3・1 五五ページ
- 36 同書 I・3・1 五五ページ
- 37 桑田秀延「神学の理解」七六—七七ページ

- 38 カルヴァン「キリスト教綱要」I・3・1 五五ページ
 39 Calvin, John; Calvin's N. T. Commentaries, vol. 4, The Gospel According to St. John, part I, p. 11—12.
 40 カルヴァン「キリスト教綱要」I・5・1 六四ページ
 41 同書 I・5・9 七四ページ
 42 同書 I・5・6 七一ページ
 43 同書 I・2・1 五一ページ
 44 同書 I・5・15 八一ページ

参考文献

- Calvini Ioannis; Institutio Christianae Religionis, edit. by Tholuck, A, Berolini, 1846.
 Calvin, John; Institutes of the Christian Religion vol. I—II, edit. by McNeill, John T, trans. by Battles, F. L. (The Library of Christian Classics vol. XX), The Westminster Press, Philadelphia, 1960.
 カルヴァン「キリスト教綱要」I—IV 渡辺信夫訳 新教出版社
 Calvin, John; Commentary on Genesis, trans. by King, John, The Banner of Truth Trust, Pennsylvania, 1874.
 —; Calvin's New Testament Commentaries vol. 3, trans. by Morrison, A. W. Wm B. Eerdmans Publishing Co., Grand Rapids. Michigan, 1965.
 —; Calvin's New Testament Commentaries vol. 4, trans. by Parker, T. H. L.
 カルヴァン「新約聖書註解」VII ローラ書, 渡辺信夫訳 新教出版社 1964
 —; 「新約聖書註解」X ガラテヤ書・エペソ書 森井真訳 新教出版社 1964
 —; 「信仰の手引き」渡辺信夫訳 新教出版社
 印具 徹「中世思想——中世スコラ学を中心として——」日本キリスト教団出版局 1979
 —; 『スコラ学』キリスト教大事典 教文館
 桑田秀延「神学の理解」長崎書店 1939
 大塚節治「基督教人間学」全国書房 1948

- Seeberg, Reinhold; *Lehrebuch der Dogmengeschichte*, trans. by Hay, C. [H.], Baker Book House, Grand Rapids, Michigan, 1961.
- Niebuhr, Reinhold; *The Nature and Destiny of Man*, vol. I. Human Nature, Charles Scribners Sons, New York, 1964.
- Torrance, Thomas F.; *Calvin's Doctrine of Man*, Lutterworth Press, London, 1952.
- W. ニーゼル 「カルヴァンの神学」 渡辺信夫訳 新教出版社 1960
- Wendel, Francois; *Calvin*, trans. by Mairret, P. Collins, 1965.